

21世紀ひょうご市民学会 会報



37号

2018年8月15日

—編集・発行—

21世紀ひょうご市民学会

「神戸生活創造センター」登録番号 630

代表 澤木昌典

<http://www.hyogo21ctzn.com>

大阪北部地震、西日本豪雨で被害に遭われた皆様にお見舞い申し上げます。

◆◆◆ 活動報告 (平成30年3月～平成30年7月) ◆◆◆

❖ 3月15日(木) 講演会 開催

「なぜ数学を学ばなければならないのか。高校生の疑問に答える」をテーマに、大竹真一氏(京都府立大学非常勤講師)から、小中学生で学ぶ算数と高校生になって学ぶ数学との違いについて説明していただいた。

❖ 4月12日(木) 第51回 知的サロン 開催

最近の新聞記事から、認知症対策を中心に、苗村氏から報告。

❖ 5月10日(木) 第3回 研究会 開催

「見学会アンケートの結果」と重要伝統的建造物群保存地区「近江八幡市」の概要紹介。

❖ 6月14日(木) 総会開催日、特別講演、会報37号発行などについて討議

❖ 7月21日(土) 平成30年度総会と特別講演を開催

お知らせ

1. 9月度 定例会のお知らせ

日時:平成30年9月13日(木) 13:30～15:30

場所:神戸生活創造センター ミーティングスペースNO.3

(JR神戸駅浜側「神戸クリスタルタワー5階」 TEL 078-360-8530 (代))

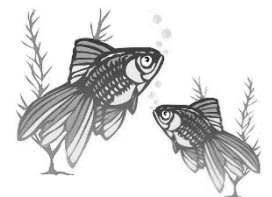
2. 会員の出版の紹介

★「神戸まちかど歴史学」豊田實氏 著(神戸新聞総合出版)

★「どうして高校生が数学を学ばなければいけないの?」大竹真一氏 著(大阪大学出版会)

3. 新年度会費納入のお願い

同封の「振込取扱票」にてお支払いください。



第12回 平成30年度総会を開催 ～今年度も実地研修・見学を実施予定～

平成30年度21世紀ひょうご市民学会総会(第12回)が猛暑のなか、7月21日(土)午後1時半から神戸市中央区中山手通りの神戸市教育会館403号室で開催されました。当日出席者は16名(委任状出席9人、オブザーバー1名(議事終了後の講演者)を含む)でした。議長には澤木代表が就き直ちに審議に入りました。

第1号議案では「平成29年度会務および事業報告並びに収支決算の件」が報告・審議され、まず会務報告では担当世話人より会員数が昨年6月の21名から今年6月には19名に減少するなど当学会の存続にかかる厳しい状況が報告されました。続いて前年度の事業報告では、知的サロン、研究会、広報活動などの状況が資料に沿って報告されました。うち研究会活動については活動拠点(神戸生活創造センター)での研究会開催のほか、関連研究の一環として昨年11月には奈良県宇陀市の宇陀松山重要伝統的建造物群保存地区の実地見学を行ったことが述べられました。一方、広報活動では、期中3回の会報が発行され、それに伴い適宜、ホームページも更新されたことが示されました。

次に平成29年度決算については、収入が限られるなか支出は実行段階で極力節減に努めたため、多くの支出項目は予算内に収まりましたが、特別支出に組み込んだ実地見学費用の影響から支出が嵩み、次期繰越金は前期に比べ約10万円減少、約368千円になった旨が説明されました。続いてこれら同年度の収支決算の監査結果について、出席監事より適正との報告がなされました。この後、第1号議案は異議なく承認されました。

第2号議案は「平成30年度事業計画および収支予算の件」でした。このうち平成30年度の事業計画は、前年度と同様に、知的サロン、研究会(屋外研修を含む)、広報活動の3事業を柱として活動するというものでした。他方、これらの活動を支える収支予算については、会員数の減少から収入予算が減る一方、支出面では今年度も前年度繰越金を背景に特別支出で実地見学・研修(篠山方面予定)を行うこととし、その他の活動費も含め、予算として前年度と同額の約181千円が計上されました。この結果、今年度末の次期繰越金は前期末より更に減少し、約240千円になるとの説明がありました。このため審議では実地見学予算は執行段階で何らかの工夫が必要との申し合わせを了解して、第2号議案が承認されました。

第3号議案「平成30年度役員の内件」は、現役員が就任2年目のため澤木代表以下全員の留任が確認されました。

以上で平成30年度総会議事はすべて終了し午後2時10分閉会となり、しばらく休憩の後、元株クボタ専務取締役木下忠彦氏による講演「人生のなかで、老齢期をどう考えるか。わたしの実践例」(3頁参照)に移りました。(苗村記)



特別講演

『人生のなかで老齡期をどう考えるか わたしの実践例』

平成30年7月21日(土)

元(株)クボタ専務取締役・健康長寿問題研究家

木下忠彦



はじめに

文明が便利さを追求するあまり、身体(からだ)を使わない楽な状態が定着した。その上、情報化社会は「知る」ことを重視し、意識中心の生活が日常化している。身体活動はますます希薄になっている。

▽老人の実態

現役を終えると気楽に楽をして余生を過ごしたいと考えるのは自然なことではある。一方、寿命がここまで延びると、かつての老人のように隠居スタイルで過ごすことを「よし」とする人は少ないであろう。いわば「第二の人生」をどう過ごすかということがテーマとなる。

▽望ましい老人像をどう考えるか

本質は『命』をどう考えるか、ということにいきつく。「わが命は奇跡である」と言いきってしまっているように思う。137億年の宇宙史、38億年の生命史、1000万年～700万年の人類史。とくに19万年～16万年のホモ・サピエンス史。この気の遠くなるような繋りの最先端の一点に、あなた、わたしが存在する。命を丁重すぎるほど丁重に扱っても罰(ばち)はあたらない。この貴重な命の残り時間は少なくなっている。この残りわずかな時間に、最後の知恵を絞りきって生きることが命への返礼といえる。命をいただいた者の責務でもあろう。いわば命に喜んでいただくということでもある。心身ともに自立して周りに迷惑をかけることを極力少なくし、自らの命が喜ぶことに多くの時間をさくことに集中したい。現役の人たちや若者から、あのような老人になりたいと思ってもらえるなら、社会へのささやかな恩返しにもなる。

▽心の持ち方

現役時代は社会的責任を果たすことや自分の存在価値を高めることに主眼をおいて生きてきた。周囲から存在価値を認められようと生きてきたわけである。この志向を断ち切ることはむづかしいが、自己の内面の成長充実に軸足を移すことが、いただいた「命」を全うするうえで欠かせないことである。この外向きの価値観から内向きの価値観への転換には強い意志力がいる。「現役時代の生」と「老境の生」を併せてこそ「命」を全うしたことになるのではないかと。いわば生の完成ともいえよう。

日野原氏は、この生の完成のために、新しいことへの挑戦を薦める。現役時代に使った脳は四分の一ほどで四分の三は未開発のままという。勇気をもって新しいことに挑戦することこそ、豊かな人生につながるのではないかと提唱する。自らの能力のなさも顧みず、短歌・水墨画・ピアノ・山登り・ボランティアに挑むことにした。明らかに世界が広がった。狭い世界しか知らなかったとの実感がある。人間への思いも格段に広く深くなった。新しい世界には秘密が一杯埋まっている。やってみないとわからないことだ。

▽脳と筋肉を一体・運動して使おう

両者を合わせて精いっぱい使っている人に元気な人が多い。いわば、横着せずにこまめに活動している人である。脳と筋肉は使えば使うほど活性化し元気になる。脳が活性化していれば生きる理想に向かって発想し続ける。一方、筋肉は脳細胞に刺激を与え脳細胞の増強にも役立っており、ガン予防に役立つ物質をも生成しているという。実践として、一日一回息がハアハアするくらいの運動をすることが細胞を活性化し、筋肉の増強を促し、また、心肺能力の向上にもつながる。散歩にも一工夫加えて、筋肉による刺激を与えたい。日常生活に科学の成果を取り入れて実践に移したいものである。

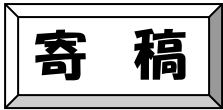
【木下忠彦(きのした ただひこ)氏プロフィール】

1964年慶應義塾大商学部卒

同年久保田鉄工(株)(現クボタ)入社、2003年同社専務取締役

同年久保田松下電工外装(株)(現ケイミュ(株))会長(～07年)

2007年(株)クボタ顧問歴任



《スマホの本当のリスク》は知られていない

京都府立大学非常勤講師 大竹 真一

スマホの使い過ぎで、寝不足、依存症、ゲームにお金を使う、多くのリスクが……、でも、それらは、何もスマホに限られたものではありません。マンガ本、推理小説、純文学、鉄道、天文観測など、楽しくて寝不足となるくらいのもりこんだ経験を持つ方も少なくないでしょうね。こうしたリスクは、身の回りにたくさん見られます。これらは、周りも気づきやすいし、本人も自覚していることが多いのです。

《スマホの本当の怖さ》は、誰も気づかないうちにむしばまれ広がるようなリスクです。それは、**知性・教養を遠ざける**というリスクです。ええっ？ そんなことあるの？？と思う方(で、スマホを持つ方)は、スマホ開けてみればすぐにわかります。

今、私のスマホを開けてみましょう。プロ野球のセ・リーグの試合結果3つが出てきました。私は、セ・リーグの試合結果に関心があるからです。なぜかスマホはそれを知っているのです。パ・リーグの試合結果は出ていません。サッカーもバスケットボールも出ていません。私はそれらには興味がないからです。

スマホは小さなコンピューターです。どのファイルを使ったか、どのページを見たか、何を検索したか、どこへ行ったか、それらを所有者のデータとして知って、興味があることを、先取りするのですね。逆に、興味を持たせたいという(営業的な利益を目指す)目的で、情報を強制的に提供することもあります。

これでは、**自分の興味ある分野と他者が選んだ分野の情報だけを受け取る**ことを強制されるのですね。これも本人が自覚しないままに。

*

教養の広がりや、偶然の産物であることもしばしばです。新聞のスポーツ欄のプロ野球の記事を見ていると、ふと、偶然隣にあった、大相撲の記事が、東京オリンピックの記事が、目に入り、ン？と思いつつ読んでしまっていることもよくありますね。そして、大相撲の伝統やオリンピックの様々な物事の決め方に不条理を感じる、こうして知らない間に社会問題と関わってきます。こうした関心の拡大はスマホでは起こりづらいですね。

これまであまり興味を持っていなかったことに関する文章を読むときは、おのずと、じっくりと内容を見ながら考えながら読みます。知らないことが多いからです。

考えるいい機会を得ることにもなります。

何も新聞だけではありません。何かわからないことがあると、スマホで検索も若者の常識になっているようです(その中には、間違った内容のことも少なくないのですが)。しかし、書物の辞書で調べると、その周りにある言葉に目が行くことも少なくありません。書店で買おうと思った本の隣にある本のタイトルが目に入り、思わず手に取ることもあります。

わからないことを誰かに聞くのもいい機会を得ますね。その内容について議論したりして、幅広く知識や見聞を広めることができることもあります。さらに、知識、思考にとどまらず、他の人の経験を追体験することもあります。知らなかったことを見聞きする行動を起こすことになるかもしれません。そうした経緯を経て、考え、教養の範囲を広げて**知性・教養を身近なもの**とすることができるのです。

*

電車の中で少なくとも半数以上がスマートフォンに入っている、こんな光景を目にすることは珍しいことではありません。そんなに、自分の興味の世界にだけ浸っていてどうするの？と思ってしまう。

電車の中は、様々な興味・関心を広げるいい機会です。窓の外を見れば、四季の変化が、見て取れます。木花や日照、風景の変化から季節感を得ることになります。いくつもの情報やえっと思うことが見出されるかもしれません。車内に目をやると、その車両がつくられた年度や会社名が書かれているのを見つけます。車両はどのくらいの間使用させるのかとか、この形式はどんな車両だろうとか、いろいろ疑問や思いが広がっていきます。これらの情報・疑問・思いが総体として知性・教養に育って行くのです。

こうしたことは車中だけではありません。町の中を歩くとときも同様です。

*

様々なことを感じ、思いを馳せる、その機会をスマホは奪ってしまう可能性があるのです。

建物の中に居て、今雨が降っているかなと思うとき、スマホで天気予報を見る、というような若者には、「窓の傍まで歩いて行って、外を眺めれば雨が降っているかどうか分かるよ、もっと面白いものが見つかるかもしれないよ。」と言ってやりたいですね。



あとがき

21世紀ひょうご市民学会 ホームページ <http://www.hyogo21ctzn.com> をどうぞご覧下さい。ホーム(最新情報・お知らせなど)、活動内容、知的サロン、研究会、会報、入会案内など詳細が掲載されています。